



開かれた教学伝道研究センター

(あさ い じょう かい)
浅 井 成 海

(一) いま遇う喜び

いよいよ、御影堂平成大修復工事が完了し、四月一日に「御動座法要」二日に「本願寺御影堂平成大修復完成奉告法要」が勤修された。五月二十二日~二十六日まで「本願寺御影堂平成大修復完成慶讃法要」がお勤まりになる予定である。

本当におめでたいこと、うれしいことである。さらには、大修復が成った御影堂の親鸞聖人の御影の御前において、聖人の七百五十回忌の法要がお勤まりになるその勝縁にお会いすることができる、なんとありがたいことであろうか。聖人が『教行信証』総序で「遇ひがたくしていま遇ふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり」(『註釈版聖典』一三二頁) とのお慶びは、我われ一人ひとりの今の慶びでもある。

(二) さまざまな研究成果を発表する

ところで「教学伝道研究センター」の設置の目的は三つの柱で示されている。

(宗則の総則)

- ①世相の推移と思想の動向を把握すること
- ②現代社会の要請に応える浄土真宗の教学研鑽の体制を確立すること
- ③もって教学伝道の振興に資すること

この三つの柱のもとに、研究体制の充実のために、本願寺教学伝道研究所と本願寺仏教音楽・儀礼研究所の二つの研究所が置かれている。

その研究成果についてもすぐれたスタッフの努力によって次々と発表されてきた。その一々について細かく述べることは煩雑となるので述べないが、時代に即応する教学とは何かが研究され、いずれその成果がまとめられ、報告されることになっている。朝夕に読まれ、つねに親しみやすい親鸞聖人のことば、それは「救いのよろこびを語る言葉である」が、これも近くみなさんに届けられることになっている。

また、本願寺仏教音楽・儀礼研究所では、今後のご遠忌法要おんきにどのような音楽法要がなされるのがよいか、工夫・研究がなされて、これもすでに発表されたことである。

なお本当に地味な仕事であるが、「季刊せいてん」が一年四回発刊され、いかにみんなが「聖典に親しむことができるか」いろいろ工夫され、また『浄土真宗聖典全書』全六巻の編纂や聖典の現代語訳も次々と発刊されてきた。

また、「仏事に関わる相談」や「いのちの電話相談」あるいは「自死」をめぐるシンポジウムを通して、みんなでこの問題にとりくみ、いのちの尊とうとさをあらためて見つめなおす試みがなされてきた。

(三) 現代に学び、教学を現代に聞く

先にあげた「教学伝道研究センター」の三つの柱は、実に重要な基本理念を示している。「浄土真宗のみ教えは素晴らしい、しかしむずかしい」「浄土真宗のみ教えは深いみ教えであるが、現実の生活、現実の問題とどう関わるのですか」「はじめてみ教えを聞く人に、聖人のみ教えをどう伝えたらよいのですか」このような質問にどう答えていくことができるか、今までのさまざまな成果をふまえながら、これからもさらに多くの研究成果を提示していかねばならない。その場合、今までも留意され、今後も大きな課題は「現代とはどのような時代であり、いかなる苦しみや悲しみをかかえているか、現代をどのように把握しているか」の問題である。つねに鋭敏な心で現代をうけとめていくこと、教学の要についてこれも充分学びながら、その教学の意味するところは何か、何を現代に語りかけようとしているか」をあきらかにしていきたい。

また、「伝道」ということについても研究の成果をいろいろに普及していくことを、より積極的に考えていきたい。

多くの方が、さまざまな「教学伝道研究センター」の活動に関心をもって、いろいろ参加していただきたい。

今まで以上に、さまざまな研究成果を発表していくことになるので、期待もし、さまざまなご意見も寄せていただきたい。

なんとしてでも充実を期さねばならぬのは、本願寺教学伝道研究所東京支所の充実である。首都圏の大きな波のうねりは、現代に無視することはできない。どう充実していくか、さまざまな工夫をしていきたい。

だいひしん ぎょうかん もんそくしん
大悲心がよび声としてはたらいて下さる「行巻」のお念仏、それを聞即信として

あきらかにされる「信巻」の信心しんかん、その信心が現代に音楽や宗教儀礼の研究成果としていかに発表されていくか、またいかに開かれた教学内容として成果を示していくことができるか、伝えていくか、研究所のみなさんとともにベストを尽くしていき

たい。

七百五十回大遠忌法要を迎えるにあたっていかに開かれた研究成果をみなさんに伝えていくことができるか、着実な歩みを重ねたい。

(本願寺教学伝道研究センター所長)